

マッセ・市民セミナー

(ちやいるどネット大阪・マッセOSAKA共催講座) (泉州ブロック)

子どもという自然 ～子ども観のストレッチしてみませんか～

小 西 貴 士 氏
(森の案内人／写真家)

* * * * *

日時：平成30年6月12日(火) 14:00～16:30

会場：高石市役所別館 多目的ホール (3階)

1. それって何？ 考えるきっかけに

私が普段過ごしているのは、山梨県の八ヶ岳という山の中腹です。標高1,400mの森や野原のあるところが、その地域の子どもたちの暮らす場所、育つ場所です。私が今関わっている保育園を運営している法人は、先ほど高石市役所の方に尋ねてみたら、高石市の面積のおよそ4分の1から3分の1近くに当たるようです。なんだか不思議な感じがしますね。日本は狭いといっても、いろいろな場所があって、人間が土地を平らにして経済活動を盛んにやっている地域もあれば、そうでもない場所もあります。子どもたちを育てるということは次世代を支える人を育てるということですから、保育や教育も当然そこに合わせるような形になっていきます。ですから、同じ国でも少し違うということがありますが、そのどちらもあるというのが私はすごく大切だと思っています。どちらかしか語れないというのはちょっとしんどいです。どちらの子どももいて、どちらの保育者もいるというのが大事です。今日は皆さんからすると、あまり見かけないような姿の子どもたちを紹介することになるかもしれませんが、今日は別にこういう人に育ってくださいますかとか、こういう保育をやってくださいということを伝えに来たわけではありません。いろいろな姿の子どもを見て、みんなで少し考えるきっかけになればと思っています。

さて、人間に対するいろいろな問いに対し、簡単に生まれてくる答えもあると思います。問いと答えの間が短いものです。しかし、世の中にはそこが長いものもあります。例えば保育者の皆さんに、人間の子どもは生まれてどれぐらいの時間が経つと二足歩行ができるようになりますかと聞くと、大体ご存じで「まあ、1歳ぐらいじゃない？」と返ってきます。では、「人間はなぜ歩くようになるのですか」と聞くと、これは答えるのが難しい。問いと答えの間がグッと長くなります。しかし、このような問いはとても大事なことです。

私は、生物学や生態学といったまなざしで子どもたちを見てきました。保育士の資格も持っていて、認可保育所で副園長という管理職の立場を3年させていただきましたが、私は教育学や心理学がベースになっている今の保育の視点から子どもたちを見るより、生物の視点から見る方が慣れているのです。例えば先生方がよく言われる「育ち」や「育つ」というのは、他の命の場合、成熟条件を満たすという言い方をしたりします。

人間が歩くようになる、移動するというのは、恐らく、人間という生き物の大切な成熟条件の一つです。初期体験で歩くことが苦し過ぎると、移動したいという意欲は削がれる傾向にあると考えられます。しかし、初期体験で歩くことがすごく楽しいと、移動することにとっても意欲的になっていくということは、保育でもいわれています。ですので、人間がなぜ歩くようになるのかという問いは本当はもっと考えてもいいことなのですが、それと同時に、今の時代は「もし歩けない場合はどうなるのですか」という問いがあります。昔は「歩けない場合はどうなるのですか」という問いが成立しないような時代がありました。歩けないことイコール、人間の生存確率を下げていた時代です。しかし、今は歩けない状態の子どもたちも大人になっていく時代なので、「人間はなぜ歩けるようになるのですか？」の問いの下に、さらに複雑な問いが生まれています。

ただ、問いというのは、そんなに簡単に答えが出なくても、ずっと考え続けることに意味があるようなものもあるのではないかと思います。皆さんが言う「子ども」や「育ち」や「育つ」というものは、皆さんの中にイメージはあるのだろーと思います。今日はそれにプラスして、最近あまり皆さんが持たれていないようなイメージも共有できたらと思っています。そうはいっても何のことだか分からないと思うので、最初に1本スライドショーをご覧ください。

2. 子どもの育ちと自然

スライドショー1開始

スライドショー1終了

今日のタイトルは「子どもという自然～子ども観のストレッチをしてみませんか～」でしたが、ここに来る道中、考えてみて、サブタイトルを「～自由の眼鏡屋さん～」に変更しました。物事というのはいろいろな見方があると思いますが、今、世間で圧倒的にはやっているのは、「子どもと自然」という見方です。どこかで研修や原稿をお願いされても「子どもと自然」というふうに書いてくださいとか、お話ししてくださいとお願いされます。お母さんが読む雑誌も「子どもと自然」という特集が組まれています。今はどうやら、子どもにとって自然とはどういうものなのかということについて、多くが求められているようです。

人間にとって自然とは何かという、この問い自体が駄目だと言っているわけではあり



ません。すごく大事ではあるのですが、この問いがそもそも見失っていることが一つだけあると思います。それは、人間にとってではなくて、人間は自然なのか、自然ではないのかというところがぼやぼやしたまま、人間と人間以外（自然）の関係を教えてください、それ以前のところは自分で考えてくださいとなってしまうことです。しかし、そこそこが実はとても大切なのです。例えば現場の先生たちは、子どもたちの命を預かって守らなければいけませんが、そのためには他の命を殺さなければいけません。例えば、蚊や蜂です。これをどんどん殺すためには、蚊や蜂に対してある程度無関心だったり鈍感になるのだと思います。そこが敏感だったら、子どもたちとの暮らしの中でずっと殺し続けるというのは苦しいです。しかし、この国の保育では、「幼児期に自然と出合うことは命の大切さを育んでいく上でとても大切です」といわれます。一方で鈍感になっておきながら、一方ですごく敏感にならないといけない。殺しながら「命は大切なんだよ」と子どもたちに言わなければいけない。そういう難しいことが、私たちの身の回りにたくさんあります。蚊や蜂を殺さないでくださいと言いたいではありません。そういうことも併せて考えてみるところから、子どもとは何なのかということを考えられないかと思うのです。

倉橋惣三くらはし そうぞうさんの言葉に私の写真を合わせるというのを、玉川大学の大豆生田先生おおまめ う だとさせてもらって、一連の作業を『小さな太陽』という本にまとめました。そのあとがきにも書いたのですが、倉橋さんの『育ての心』が出版された1936年の、この国の乳児死亡数（1歳まで）は24万5,357人でした。そこから80年経ち、2015年の乳児死亡数は1,916人です。人の子どもは、今、どんどん死なくなっています。

ホモサピエンス（人間）は、サルを含めた他の生き物と比べてすごく変わっていて、だらだらと恋愛します。6月が恋愛の季節で、そのときだけみんな盛り上がるみたいなことはありません。ということは、ずっと妊娠して、ずっと子どもを産む可能性があるわけです。いわゆる「年子」が生まれる可能性があります。5年連続で子どもを産むことも理論上可能です。チンパンジーやオランウータン、ゴリラは無理です。オランウータンは授乳期間が約8年もあるので、その間は次の子を産むことはできません。しかし人間は、自分一人では育てることができませんというぐらいに、子どもを産むことができます。なぜかという、一説にはたくさん子どもが死んだからといわれています。自分一人で育てられないくらいに産むということは、人間は我が子を血縁以外の個体に「ちょっと見ていて」といって預けて育ててもらおうということです。これも不思議で、人間というのはすごいなと思うところです。他の動物でも、自分で育てられないのでヘルパーをお願いする動物はいますが、それでも血縁関係が多いのです。その中で人間は、血縁を超えて、全く見知らぬ人に自分の子どもの育ちを任せます。これは随分前からそうで、声のコミュニケーションがあまり整っていなかったころから人間は任せていたといわれています。考えてみると、任せるというのは変な話です。例えば、ツバメたちが毎朝定刻になると幼いヒナばかりを1か所に集めて育てているなんて、見たことがありませんよね。しかし、人間はそうやっているということです。

イナゴに稲を食べられたくない人間が願っていても、実際は食べられてしまうことがあります。川の水が氾濫してほしくないと思っても、氾濫してしまうことがあります。それと同じように、かつて、子どもに死んでほしくない願ってもたくさん死んでしまう時代がありました。豊臣秀吉は、願いに願って授かったといわれている子どもをすごくかわいがりました。この子だけは神さまに取られたくない願いました。大切な子だというと神さまに取られてしまうので、昔の人たちは、子どもがある年齢になるまで素晴らしい名前を付けないようにしていたそうです。秀吉もその子に「棄（すて）」という名前を付けましたが、それでも取られてしまいました。恐らくそういう時代には、子どもをイナゴや川の水と同じように、自然と同じように見るまなざしがあったと思うのです。

そのまなざしはいつまで続いたのかというと、恐らく第二次世界大戦後しばらくまでです。そこまではたくさんの子どもの死んでいたので、その時代の保育者である倉橋惣三さんも、子どもの育ちを植物や虫、自然現象と重ね合わせて表現されているんじゃないだろうかと思います。その後、子どもがあまり死ななくなり、一方で自然から大量収奪する文化の中で他の命がどんどん失われるようになると、自然とは子どもにとって何なのだろうか、人間にとって何なのだろうかといわれる時代になるのです。一昔前はこんな見方がはやっていたのだから、そんな見方があってもいいよねというのが、今日のタイトルである「子どもという自然」という見方です。別にそういう見方をしなければいけないということではなくて、そこから考えてみたらどのようなことが出てくるだろうかということです。

そうなってくると、心理学ベースの保育学だけにとらわれないでよくなるかもしれません。いろいろなことが人や子どもの育ちについて考えるきっかけを与えてくれるかもしれません。今日はそういう話です。最初は人ではない命のスライドショーから始めたいと思います。ちなみにこれは私の日記帳みたいなものです。一緒にのぞき見ながら、命や育ちを考えるストレッチをしましょう。

3. 眼鏡を掛け替えて見えてきたもの

スライドショー 2 開始

スライドショー 2 終了

生態学の眼差しからすると、小さなものが存在するというイメージや、小さなものが「育ち」「育つ」というイメージ、小さなものが育ちの中でうれしいことやつらいことに遭うときのイメージを、図鑑に書いてあるような育ちの概論から導き出そうとするだけでは、すごくもったいない気がします。全ての生命の可能性は、グラフにすると緩やかな曲線を描きます。中央部の曲線が膨らむあたりは、やはり数が多いです。一方で、



両端は数が減ってきます。数が減ると、意味が減るというわけではないんです。生命についての研究者は、その少数の研究を一生懸命やります。概ねのことは、過去のデータを見れば大体分かりますが、少数の部分は実際に見ないと分からないことも多いのです。ですから、その命を殺して知ることができる範囲はどうしても限られます。生きた状態から知らないといけないので、飼育して知ったり、それでもまだ分からないことは野生を観察して知らないといけません。それは、私たちが命を見るときにまなざしとしても関係があります。概ねだけではなく、目の前の少数からしっかり学ぶことにちゃんと意味があるのです。花は花、虫は虫、虫取りのための虫、花を生けるための花、そうになってしまうと意味がとても限られてしまいます。また、花はどうでもいいけど子どもには興味があるというもおかしな話です。人間のまなざしというのは、そんなに都合よく切り替えることは難しいと思います。どうしても人間は、普段自分が見ているもの、強く意識していることにとらわれてしまうのです。保育者の子どもに対するまなざしもそうです。本を読んだり、話を聞いたりした、概ねの話をベースにしたまなざしも大切です、目の前の少数の子どもをベースにしたまなざしも大切だと思います。

4. 考えることの面白さ

卒園した教え子で、この春から京都大学へ入った人がいて、つい先日、会って話してきました。彼はその年の卒園児28人のうち、唯一、小学校の体験入学のときに全く読み書きができない子でした。約20年前の山梨の田舎でも、お兄ちゃんやお姉ちゃんがいたり、きちんと教育を受けた保護者が増加して、読み書きができる子が多数でした。彼が小学校に体験入学で行くと、小学校の先生は、お父さんに「せめて4月に入学してこれるときに自分の名前くらいは読めるようになっておいってください。書けなくても結構です。読めないと、自分の靴箱がどこかも分からず不安になることが考えられます。そんなことがきっかけで、学びが遅れることも考えられます。読み書きというのはやはり基本ですから、できないと、その後ずっと引きずりますよ」と、丁寧に話してくださったそうです。

しかし、そのお父さんは、そのことについて全く心配していないという人でした。私にも、「だって、今までこの子がこの5～6年間かけて育んできたものは、自分の下駄箱がどこか分からなかったら、『僕、ここに靴入れていい?』と聞く、そこを育んできたわけでしょう。どこを見てその人の育ちを考えるのかというときに、短期的な結論付けはしようと思えばできるけど、長期的に見たときの可能性もあるわけでしょう」と話してくれました。でも、彼は成長すると読み書きが本当に好きになりました。センター入試は正解を選べと言われるからつまらないと言い、阪大や京大の入試問題は、見るだけですごく面白いという人になってゆきました。彼が大学に入って、今、何が面白いと聞くと、「俺の時間割に奇跡が起こったんだ。週の前半にまず宇宙科学入門という授業があって、地球を俯瞰した経験がある人が地球のことを話してくれる。その次に霊長類学入門があって、考古学入門があって、文化人類学入門がある。宇宙の方からずっ

と下りていって『人間って何だろう』というのを考えるから、先輩たちは5月になったら別に学校に行かなくていいんだぜって教えてくれたけど、楽しくて行きたくてしょうがない」と話してくれたのです。それを聞いたときに、私は「そうだよな。人間って何だろう、子どもって何だろうと考えるときの学びの面白さって絶対にあるよな」と思い、今日、皆さんと子どもを分かち合うより先に、人間以外の命のことをお話した次第です。

5. 管理職と市場原理

スライドショー3開始

スライドショー3終了

森の中に今年61年目になる清里聖ヨハネ保育園という私立の認可保育所があり、その園舎を建て替えようというプロジェクトで、当時、管理職になった私はそのプロジェクトを中心になってさせてもらいました。お母さんや職員たちと一緒に周りの森の木を自分たちで切り、それを使って園舎を建てていったのです。今までとは全然違う園の育ちがあり、すごく面白くて全力で取り組んだのですが、その中で私は、見失っていたものがだいたいあることに気がきました。

命というのはいつも濃い淡いがあったり、真ん中があったら周辺があって、というお話は先ほど曲線でご紹介したのですが、濃いものや真ん中に夢中になるがあまり、淡いものや周辺が写真で撮れなくなってしまったのです。そして私の子ども観は、写真に収まったところにぐっと寄っていつてしまいました。自分ではどうしたらいいのかわからないのですが、寄ってしまっていることだけは分かりました。前出来ていたことがなぜ今出来ないのかという苦しさを感じ、私は園長先生にお願いしてパートタイマーの立場になり、もう一度いろいろと確かめる時間を頂きました。

森という場所は誰も耕しません。県の職員が来て耕したり、水をまいたり、肥料をやるわけではありません。では、なぜあれほど命がずっと循環しているのでしょうか。そのからくりは体系的に学んでいなくても、森でしっかり観察していれば分かることです。それがどうして私たち暮らしでは、耕して水をやって肥料を入れないといけなくなっているのでしょうか。いい悪いの話ではなくて、そのあたりから考えてみたいと思ったのです。ですから私の畑は、一つは耕していません。耕した方しかない、そちらの方向に私の考え方が寄ってしまう気がして、別の眼鏡も持っておきたかったからです。

私の奥さんのいとも畑をしていて、私たちは仲がいいのです。私たち夫婦のやっている畑を「おまえ達は本当にばかだな」と笑いながら気にしてよく見に来てくれるのですが、彼の話聞きながら畑をよく観察すると、そこで働いている原理は市場原理なんだということがわかります。命を扱っているのも、もちろん命の原理も働いているのですが、一番大きく影響を与えているのは市場原理だと思います。



元々、市場原理は、「足りないからちょうだい」という人と「余っているからあげる」という人の間を結ぶために考えられたもので、その間を取り持つのがお金です。そのお金の大切な約束事というのは時代によって変わっていて、今、食材に関するお金で大切な約束事になっているのは、安全・安心です。規格があって、それに沿って出荷するので、ピーマンはある程度の大きさになったものしか段ボールに詰めてトラックで運ばれていきません。ですから、彼はサイズを気にします。

一方、私は出荷しないので、サイズを気にする必要は全くありません。単に命の原理原則を見たいがために作った畑です。ですから、わが家のピーマンは小ぶりで、しかもゆっくり育つのですが、何だか味がぎゅっと詰まっていて、奥さんのいところも「おいしい。でも、これは出せない」と言います。わが家のピーマンに包丁を入れたら笑顔に見えたのは、たまたまそうだっただけで、別に規格もののピーマンでも笑顔に見えることはあります。しかし、わが家にそのピーマンを連れてこなかったら、笑顔のピーマンは撮れませんでした。なぜ連れてきたかという、それを畑に捨てる必要がなかったからです。いい悪いの話ではありません。私も出荷しないといけない人間なら、規格に合わないといって畑に捨てていた可能性が高いです。ただ、これがきっかけで、ちょっとしたことで、一つひとつの命に目が留まり、それを愛おしいとか、大切に思うようになるきっかけはあるのだと思うようになりました。

きれいに整備された畑も絶対に否定してはいけません。これを否定してしまいがちなのが、森の保育の危ないところだと思います。今の世の中の流れを否定したら、死ななくなった子どもたちを養ってはいけません。細かく考えると持続可能ではない部分もあるとは思いますが、こうやらないと目の前の子どもたちに届かないということも実際にあると思います。

奥さんのいとこの畑に捨て置かれている白菜は、一部分が少し茶色くなっています。別にそこだけ切れば食べられるのですが、安心という規格に合わなかったために捨て置かれたわけです。一方で、同じ時期のわが家の白菜は、食べずに成熟していったものから花が咲き、実って種がなりました。次につなげようとする生命活動です。白菜は自分たちも食べるのですが、これから次が生えてくるといいと思うものは食べないで、次の命につないでいきます。その種取りを女性陣が縁側でするのですが、しゃべりながら作業するので、砂利の上にこぼれ、そこから白菜が育ちました。そういうのを、ど根性白菜といったりしますが、私はそれはちょっと違うと思っています。生物学的にいうと、その命のことをよく知った上で、あえてぎりぎりのところまで圧を掛けたものの方がど根性です。成熟条件を満たさなくなるぎりぎりまで、例えば薬剤を振りかけたり、他の命を関わらせないようにして、どんどん太らせていく。耕した畑と耕していない畑だけではありません。

私が20年前に接した子どもたちが今働いている社会は、その二つのイメージしかなくてどちらかを選ぶみたいなおところではありません。この写真のように、銀座のビルの中に畑があるのですが、そこで育った野菜と、八ヶ岳高原で太陽と風を浴びながら薬剤を

7回も振りかけて消毒されている野菜だったら、どちらを子どもに食べさせたいですか。もしかしたら、薬剤を7回も振りかけていても青空の下で育った方がいいと思うかもしれませんが、実は銀座ビルの野菜は農薬使用量99.9%減で、種のときにしか消毒していないそうです。子どもの命を大切にしていきたいと思う中で、私たちの他の命に対する関わり方はだんだん変化していきます。そうすると、見方もだんだんそちらに合わせていくところがあります。これもあるけどそれもあって、あれもあるという中で、どのように命のことを見ていくのかという話です。

6. 子ども観のストレッチ

園舎の建て替えプロジェクトのとき、撮りたいと思う子どもの姿は見えているつもりだったのですが、指の間からぼろぼろこぼれる感じで、なぜか写真に写りませんでした。今から考えると簡単なことで、プロジェクトの真ん中ばかり追いかけていたからです。それはそれで面白いのです。例えば××君が「氷って朝来たら氷になってるけど、夜、凍るところを見たことがない」と言ったら、保育者が「じゃあ、凍るところをじっと見ていようか」と言って、子どもがじっと見ている、そこそ撮りたくなるわけです。しかし、そこだけ追いかけていると、そこに乗り気しない人と保育者の間の会話は写らないわけです。私は管理職になって真ん中ばかり見て、うちの園の実践をいろいろな人に見てもらいたいというスケベ心が出てしまっていたのだと思います。

ここから何枚か、子どもの写真を見てもらいたいと思います。

私たちは、人の話を聞くときは真っすぐ話している人を見て聞くようにということを子どもたちに言うことがあります。私たちは群れで生きる生き物ですから、その群れの秩序が崩壊してしまわないように、今はこういう形で聞いていてねという約束を子どもたちと交わしているだけです。それはそれで大事です。でも、私たちは向かい合わずに隣に座って大切な話をすることもできるし、時には顔を見ずに話し合うこともあります。それなのに、いつの間にかその形で聞いてくれないと自分が仕事をしていることにならないと感じるようになってきます。そうなったときに、随分多くのものがこぼれるような気がしています。

この写真の4歳のイツキちゃんは寝転がって話を聞いています。こちらがリスの剥製を見せながらリスについて一生懸命話していたときも、ずっと後ろでごろごろして話を聞いていました。次の日、お母さんが「昨日帰ってからイツキがすごくたくさんリスの話をしてくれました」と言うので、どんな話をしてくれたのか聞くと、きちんと要点を押さえた話をしていたのです。寝転がっていても、話の要点を押さえて聞けているのです。こんなふうに、私は、その命が「あなたはここにいていいですよ」「あなたのカタチでいいですよ」と認められたとき、どのように育とうとするのか知りくなりました。

私たちの園には山登りの日があります。「頑張ってみんなで登るよ」というのではなくて、遊んでいたら山のでっぺんに着きましたぐらい感じでやっているのですが、ヒカル君という5歳児の男の子は、前の晩に山登りをイメージしたら楽しくて仕方がなく



なって、頼んでいないのに自分でお山クイズを考えてきました。これは保育者の計画にはなかったことです。当日、道中で立ち止まっては彼が「お山クイズ」と言ってクイズを出すのです。時間は取るのですが、それが結構面白いわけです。みんなげらげら笑って盛り上がりながら山のてっぺんに着きました。満たされた彼は、お昼ご飯のとき、こんな寝転んだカタチでご飯を食べていました。そばにいる人たちがこのことを非難するかというとそんなことはなくて、またみんなげらげら笑って、「今日、ヒカル君はうれしそうだ」とか、中には「調子に乗っているんだよ」と言う子もいたりして、いろいろな言葉が交われ、言葉の豊かさが生まれていきました。皆さんご承知のように、いくら「学び」をテーマにしても、子どもたちはその日に急に学びに対して意欲的になるわけではありません。その前段階があるのです。大人が行儀が悪いと思うようなカタチで聞いていても、要所要所で認めてもらえる。今はちょっとねというときも、もちろんあるけれども、そのカタチが受け入れてもらえることは、結局はその人の主体を認めてもらえたということです。その主体こそが、何かを学ぶときにとても意欲的に関わるというカタチそのもののなのです。

このリョウ君という5歳児の男の子は、八ヶ岳から流れる雪解けの水が冷たい3月、小川にはまってしまいました。彼は川からはい上がってきて寝転がって、長靴を脱ごうと引っ張るのですが、ぬれているので脱げなかったのです。近くにいた私は「長靴を引っ張って」と言われて長靴を引っ張り、「靴下を脱がして」と言われて靴下を脱がせ、今までちゃんばらで振り回していた棒を「この指の間に挟んで」と言われて、何をやるのかなと思って挟んだら、そのままぐーっと上げていき、「そこに靴下を干して」と言われました。ああ、そういうことかと思い、干す前に靴下を絞ろうとしたら「絞らなくていいんだよ」と言われたので、「ああ、そうですか」と言ってそこに靴下を掛けました。気温は氷点下です。乾きません。でも、この話の要点はおそらくそこではないのです。生まれてきてしばらくの人たちが、初期体験として自分でこうしてみたいと思った。それは大人の都合・不都合からするとよく分からないことですし、先に生まれてきた者として、絞った方が乾きやすいよねということを伝えて学びのきっかけを作ってあげるのもいいことだと思います。しかし、私の都合・不都合でいうと、氷はいつから凍るのだろうと言ってじっと見ている子は好都合なのです。何か学んでいるなという気がしてしまいます。ですから、そういうときはポジティブに捉えるのに、よく分からない行為に関してはあまりポジティブに捉えられないということが、人にはあるのだと思います。しかし、どちらの場合も、生まれてきた命が自ら選んでそのことをやってみたいと意欲的に動いているわけです。それをさせてあげるために、そばにいる大人は安全・安心を守ってあげたり、リラックスを認めてあげたり、必要なときは助けてあげたりするのではないかと思ったりします。今日はその見方のストレッチの話なので、決してこれがいいというわけではなく、いろいろな見方があるということを知っていただければと思います。

次の写真です。地球の北半球は、私たちが冬と呼んでいる季節になると太陽からの距

離が遠くなり、雪が降ったりします。北海道の滝川市には、そらぶちキッズキャンプという難病の子どもたちのためのキャンプ施設があり、私は10年間撮影に通っています。私が森のガイドになって20年前に最初に関わった人たちが小児がんの子どもたちでした。若かったので、「生きる」や「育つ」のイメージを願いと合わせていた私からしたら、いきなりひっくり返されたような感覚でした。願ったとおりにはいかないお母さんや、そこに寄り添う医療者、教育者たち出会い、それがきっかけで今でもこのキャンプ場に関わらせていただいています。今年はここも記録的な大雪でした。宇宙の方からずっと下りてくると、都市部というのは地球上ではほんの一部の限られた地域にしかなくて、そうではない部分がたくさん広がっています。ですから、他の命も生きていて、その中で私たちも生きているというのが一番フェアな見方です。他の命は、人のために生まれてきているわけでもないと思います。ただ、その中で私たちが一生懸命生きていることも事実です。そらぶちキッズキャンプは、全国から難病の子どもたちがその日のためだけに集まってきます。普段はそういう移動もしてはいけないし、なるべく無菌状態のところにいなければいけない人たち、それを経てきた人たち、中には、もしかするとこれが最後のお出かけになるかもしれないという人もいます。

ここを訪れたある小児がんの4歳の男の子は、ツリーハウスの所まで転がって移動していきました。彼は普段、東京で暮らしていて、こんな環境で遊ぶことはできません。ましてや闘病生活もあって、生まれてこの方そういうことがあまり出来ませんでした。そんな彼が、このフワフワ雪のフィールドで、何だか転がりたくなる気持ち、皆さん何だかわかるでしょう。結果、双子のお姉ちゃんと一緒にツリーハウスまでの道のりを全部転がっていきました。10年間ここで撮影していて、この道のりを全部転がっていく人を初めて見ました。

では、子どもが転がりたいと思えば、いつも必ず転がれるのかというと、そうではないと思います。このとき、彼が頼っている大人、お父さん、お母さん、プライマリーの看護師、ドクターが「やめようね」と言ったら、彼はやらなかったと思います。ただ、このときは別に止める必要もありませんでした。病状が今とても深刻な状況でもなかったし、骨が折れやすい病状でもなかったのも、どちらかという周りの大人はそれをやらせてあげたいと共感的でした。いつも許されることではないかもしれませんが、生まれて4年の命が自らこういうふうに育ちたいと思うことに対し、周りにいた大人がたまたま共感的になれた瞬間が合わさったのだらうと思います。

そのことがとてもうれしくて、彼は帰り道も転がっていきたくて言いました。帰り道は上り坂で、スノーモービルに乗せてもらわないととても戻れないので、それは無理でしょうと思うのですが、そういう言葉が出てくるぐらい帰り道に対して意欲的になったわけです。そういうことって本当にあるんだな、普段、何かこぼれているなと思った瞬間でした。ここは私がいつも暮らしている場所ではないので、普段の私の保育とは関係ないと言ってしまうえばそれまでなのですが、そういうふうに見る目というのは、私の田舎でも同じことなのではないかという気がしています。

私がいる所は田舎なので、どうしても自然の中で育っている子どもの映像しか映りません。しかし、そういう自然体験活動ができたらいよいよねとか、そういうふうにはやらないといけないよねと言いに私は今日この場に来ているではありません。「子どもって何だろう」という気の長い問いに対し、こうかな、ああかなと、みんなで考えただけです。そのためのイメージとして、四つの眼鏡（春夏秋冬の眼鏡）の話をしたいと思います。

スライドショー4開始

スライドショー4終了

7. 自然を通して見えてくること

「げんき」という保育系の雑誌で「森からのまなざし」というエッセイを連載させていただいて、その次号の原稿で書いたことなのですが、秋に、子どもたちとすごくたくさんヤマブドウを森から頂いたのです。自然体験というのは、社会環境、例えばコップと私のような関係のことではなく、ヤマブドウと私のような関係のことです。社会環境もすごく大切なのですが、一方で、人以外の命や現象との関係の中からも人は学んでいきます。ヤマブドウなどとたくさん出合っているうちに、女の子たちのグループが「いつもはジュースが口の中にちょっとしか入らないよね」「そうね」「もっといっぱいがいいんだよ」「いっぱいだったら、いっぱい要るよね」という話になっていき、それでいっぱい森から頂いてしまったのです。キツネや鳥たちが実を欲しがっていることは今までの学びで分かっている中で、彼女たちが言っていることを一度やってみようということになったのです。

絞ってジュースにしましたが、まだ残っているのも、残った分からシロップを作りました。それでも、まだ皮と種とちょっとした絞り汁が残っているのです。これは、たくさんヤマブドウを頂いてみないと保育者としても分からなかったことです。今度は、それを使って染めものをしました。シャツやストールを染めました。それでもまだ、ぷりぷりの種が残ったので、この種は何としてもまきたいと思ってしまったのです。それは子どもたちを誘わずに、一人でまきました。

大地ではなくて、ポットにまきました。どこにまいたか分からないのではなくて、ここだと決めてまいたわけです。そうすると、その種のことがめちゃくちゃ気になるのです。11月にまいたのに暖かい日が続いて、もしかしたら芽が出てきてしまうのではないかなと思いながら見ていました。しかし出てこなくて、冬になりました。今年はすごく寒かったので、凍ってポットの中の土が持ち上がり、押し出されたしまった種がありました。かわいそうなので中に押し戻してやろうとするのですが、種皮がめくれて駄目になってしまっていました。私は最初、育ちのイメージと願いがほぼイコールで、ヤマブドウの種を植えたら、この子たちがお母さんになったときに、その子どもがまたその恩

恵にあずかれるという眼鏡でヤマブドウの育ちを見ていたので、冬に種皮がめくれてしまうようなイメージを持っておらず、落ち込んでしまいました。

この秋冬に野山のものをたくさんまいたので、春になるとたくさんの芽が出てきたのですが、ヤマブドウだけ出てきませんでした。種も小さかったし、凍み上がってしまったし、鳥が来てついばんだらうし、だんだん諦めに変わってきました。5月に入って野菜の種をまくのにそのポットが入り用で、「もうどうせ出てこないから、あれを使えばいい」と奥さんに言ったりして、ある日、花豆をまこうと思ってポットを取りに行ったら、芽が出ていたのです。自分でも本当にご都合主義だと思いますが、出ていてうれしかったです。

自分にとって育ちのイメージが願いと重なっていることも大切だと思いますが、命を考えたときに、育ちのイメージと願いは決してイコールではありません。その幅を保育では多様性というのだと思います。そして、どれだけ先を見るのか。例えば2歳までしか見ないのか、5歳までしか見ないのか。3歳でこの保育施設に入るためにはおむつが取れていないといけませんと言われたら、2歳の終わりまでに求められる姿は、おむつが外れているということになるのかもしれない。しかし、その子の5歳までを見たときに、本当に2歳の時期にそれだけの圧を掛けることが必要なのだろうかという問いもあると思います。

例えば5歳や6歳のときの育ちのイメージは指針や要領に表れていますが、それ以外の意味や可能性もあるのではないかと思います。10年先、15年先、子どもたちが長く生きれば生きるほど、子どもたちが大切に思って頼っている人が死んでいく可能性が高くなります。5歳のときより15歳のときの方が、お父さん、お母さんを失う可能性は当然高いです。そのような、育ちのイメージの幅と、育ちをどこまでイメージするのかという時間のことについては、自然体験で自分以外の命や現象と関係していく中で気付かされることが大人も多いと思っています。

この間、こんなことがありました。ある子どもが1本の木を見て、「ゴリ（私のあだ名）、この子のお母さんはどこにいるの？」と言うのです。森の中で、その木のお母さんになり得る木は周りにたくさんあります。「ちょっと分からないな」と言ったら、「ゴリにも分かんないことがあるんだね」と言ったのです。これはまさに関係性の教育で、その子は私のことを「この頼れる人は何でも知っているんだ」と思っていた、あるいは私が意図せず思わせていたのですが、その木の存在があることで、実はこの人の知らないことがあるのだという学びが起こったわけです。自然体験には、そういう大切さがあるのだと思います。

ただ、人以外の命や現象との関係性を全て自然体験でくくらないといけないかという、そうではないと思います。子どもという自然（子どもが自然である）という捉え方に広げると、もっといろいろな考え方や見方が生まれてくるのだと思います。そこから、皆さんがそれぞれ置かれている環境の中で、今この瞬間はこれが大事だということがあっていいのではないかと思います。今日のテーマに「子ども観のストレッチ」と付けま



した。

スライドショー5開始

スライドショー5終了

この週末、映画「さとにきたらええやん」の舞台となった子どもの里の^{しょうほ}荘保館長が、私たちの園に来てくださり、畑をご案内する機会がありました。この畑が、あの映画の中のような子どもたちの、思いどおりにいかないけどこんなふうに生きているという育ちとつながったらいいなと思っていたので、そこがつながって、すごくうれしかったです。何でもないようなことにも何か意味はあるのだと思います。落ち葉はごみだと捉えればごみですが、もっと別の豊かさがあるのかもしれません。最後にそんなスライドショーをご覧いただいておしまいにしたいと思います。

スライドショー6開始

スライドショー6終了

今日は、皆さんと一緒に子どもを考えてみたいという私の試みにお付き合いいただき、ありがとうございました。